

▽要するに初學の人々の寫生は、簡單なる材料を簡單に寫せばよいので、形も色も陰陽も正確といふとを忘れず、忠實に畫面に向へばよいのである。

▽繪は悟るものである。いくら口で話しても文字で書いても充分説明の出来るものではない、隨て聽たり讀んだりした計りでは到底上手になれるものではない、夫故徒らに畫論や書物に拘泥するとなき、何でも澤山寫生して熟練を重ねるに限るのである。

▽性急な人は、石塊一つ畫けぬうちから大きな景色を寫さうとするから失敗するのである、先づ石を畫き、樹を描き、雲といひ、草といひ、建築物といひ、夫々一個々々を研究して、稍描き得るやうになつてから夫等のものゝ含まれたる大景に取かゝれば、曾て研究した材料を總合する丈けて、個々について苦むとなく、一枚の繪を仕上るとが出来るのである。

▽寫生の初歩は以上御話致した通りである、何卒此春風駘蕩の好時節を空ふするとなく、屢々戶外寫生を試みられんとを希望する。

花の水彩 [一]

丸山 晚霞

自然界に於ける總ての其一を採りて、之を仔細に檢すれば、靈妙なる造化の手跡に驚かざるを得ないのである。而して、造化は其美工に施すに、麗はしき色彩を以てす。自然は純潔高尚にして無邪氣なり、その華麗なるは絶對的である。自然は神にして慈母の如く、我等を絶對に愛して居る。されど人々の多くは、かくも美麗にして、恵み深き自然を知らぬのである。自然を知らざる人は、如何に物質的の美を纏まとひ、如何に物質に富むとも、其の人は下賤である。自然を知り自然に相親み、それに依て娛樂を求むるものは、物質的の如何に貧しくとも、精神は常に富裕にして高尚である。人は物質的の美を知りて、精神的の美を知らざるもの多し、物質的の娛樂を知りて、精神的の娛樂を解せざるもの又至て多し、物質的の娛樂は盡る時あるも、精神的の娛樂は無盡なり。自然

を知らざる彼等こそ、實に哀む可き極みである。プロモンの榮華の極、尙且つ野末一ともの百合花だにも及ばず。と若し夫れ高尚優美純潔なる娛樂を求めんか、宜しく自然を知り、自然に親しみ、自然の妙味を解すべきなり。自然に近寄る方法は數あり、文學美術はその主なるものである。吾は自然を知らざる人々に向つて繪筆を強ゆ、畫は自然に親しむ媒介にして、これに因りてその一と本の花だに妙味を解し得ば、それぞ即ち天國の門戸を開らく鍵となるのである。我等は世人に向つて、この貴き鍵を與へんと欲す。聊か微意を每號に草して、水彩畫の發展を計り、その門戸を展らきて、諸君と共に天國を逍遙したきものである。

水彩畫を専門として深く學ぶは、これ程無圖かしきものは他にあるまいと思ふ。而して業を持てる人々が、業務の傍ら高尚優美なる娛樂を求めんが爲めに學ぶは、これ程入り易きものはあるまいと思ふ。最初は可然師に頼りて運筆及び着彩の方法と物の形を正格に描く透視畫法を學べばそれにてよし、その後には自然といふ活々とした師が至る所にある、それに就て學ぶうちには、自然は漸く妙技を教へ、然して無窮の快感を授けてくれるのである。こゝに至りてその目的は達したといふものである。人間が神の如き自然に近寄り、それに親しみ、或るときは師とし、或るときは友として、それに慰安を求め快感を求むる事が出来れば、之れ以上の樂みはあるまいと思ふ。されど人には、各々異なる性情のあるありて、先天的に繪畫を好尚するものあり、又更に好まざるものもある。よし好尚せざるものにて、天國の門戸を開らくべき鍵を求めばやといふ志だにあらば、畫を學ぶは易々たる事と思ふ。吾は嘗て某大林區署の官吏と識あり、其人と語る、談偶々風景に及ぶ、彼の語るを聞くに、某農學校を卒業して大林區署の吏となり、日々深山幽谷を逍遙す、其當時にありては、如何にも山住みの苦しく、山中を嫌忌して、里懷かしく都慕はしく、職を辭さんと迄考へし事幾度かありし、されど或る情實の爲め職を辭す事能はず、嫌忌を忍び、月ば年とかはりて、漸々山野に親しむ如くなりて、今は深山幽谷に興味を覺え、最初嫌忌の感情を起せしものは、悉く妙味あるものと化して、白雲深き處に子規を聞き、溪谷に亂るゝ山櫻の美しく、寒月の林外に猛狼の鳴くのも、一種詩的の感を充たして迎

ふる様になりき。と語られた、吾はこの談話を面白く聞いたのである。畫を學ぶ上にも適合するので、畫心なき人も暫く嫌忌だに忍びしなら、終には自然と親しみ、同時に其の形も自由に描ける様になり、無量の快樂を求むる事が出来る。故に吾は如何なる人にも勸むるのである。物の形を描くには線を用ゆ、線には直線と曲線、其の他には何もなく、只直曲線を配合さへすれば、物の形が現出する、文字にて自分の姓名を書く事の出来るものなら、畫の描けないといふ事がない筈である。着彩とても、西洋繪具には種々の色あれば、自然が赤ならば赤、青なれば青色を着彩すればよいのである。畫を學ぶといふ上に於て、缺くべからざるものは透視畫法である、これは一の理に基くのである故に、物の形を寫生するよりは易々たるものである。されど初學者には聊か煩はしき故、この畫法をあまり要さざる、花等より學び始むる方がよからふと思ふ。然して吾は花を至て好愛し、花に就ては大に研究したのである。故に吾は不文拙劣をも顧みず、回を續けて花に係る水彩の感、及び描寫法を草するのである。

スケッチ雜談(上)

石川 欽 一 郎

○白い物と黒い物とは畫にかくに一寸六々敷い、一鉢白と黒とは色で無いとも云へるのみならず、實際に白い物と黒い物とは有るわけではない、只習慣上そう見えるのである。高帽にフロックコート紳士は黒いように見えて、併かも黒くは無い、西洋洗濯屋の物干は白い布が澤山懸けて有るように見えて、其實白い處は少しも無い、滲塗の黒板扉も、少しも黒くは無く、青空の白雲も、實は白くは無い、其黒いと思ひ白いと見るのは、皆眼に欺かれるので、黒塗の人力車は黒い物と先づ思つて、其考て實物を見ると如何にも黒く見える、雪は白いと思つて、其考へて見ると眞白である、併し實際には黒い物と白い物とは共に存在せぬことを常に心にとめて、其黒いと見えるは、或る一種の色である、又白いと見るのも、或る色である、と云ふことを考へ、之を研究するのは、寫生上大切なることで有りませう。